

武満徹の映画音楽と 1950 年代の前衛芸術運動：実験工房のミュージック・コンクレート  
柴田康太郎（東京大学）

1955 年、作曲家の武満徹（1930～96）は続けざまにミュージック・コンクレート（鳥の鳴き声や水の音、機械の音など具体音を素材にしたテープ音楽）の手法による表現に取り組み始める。彼はその後 65 年頃までラジオ、映画、舞台など付随音楽としてミュージック・コンクレートの手法による表現を試み、そのうちのいくつかを再編集して自身のミュージック・コンクレート作品としている。本発表では、こうした武満徹のミュージック・コンクレートの手法による表現と映画史との交差のあり方に考察をくわえる。

武満徹のミュージック・コンクレートはまずは抽象映画など物語空間の外に響く音として使用された。だが武満はすぐに物語空間内の音と切り離せない音素材を使ったミュージック・コンクレートによって、その非日常性を際立たせる表現を試みるようになる。このときミュージック・コンクレートの彼にとって重要な側面は、その具体音という素材の問題ではなく、日常的な素材がテープ変調によって特殊な非日常的な音響に移っている。ここには武満の関心の変化を読み取れるのではないか。実際その後武満は具体音による音楽を試みなくなり、むしろ映画では器楽音楽にテープ変調を積極的に活用した試みを続けるようになる。だが、これはどのような変化だったと言えるのだろうか。

武満が 50 年代に所属していたグループである実験工房の者たちは、新しい技術や媒体を用いた表現に対する関心を共有し、磁気テープやガラス、写真などの媒体によって前衛的な視覚体験や聴覚体験を試みていた。武満の映画におけるミュージック・コンクレートやテープ変調の器楽への適用は映画音楽における前衛的な響きを体現するものとみなされたと言えよう。

だが一方でミュージック・コンクレート受容史と映画史との交差という観点からするとやや異なった見方ができるだろう。ミュージック・コンクレートの登場は過去の映画の効果音や音楽における録音技術の活用に光を当て直すことになった。また一般に 1950 年代の日本でのミュージック・コンクレート受容は必ずしも今日その特徴とされる具体音の側面に注目したものばかりではなかったが、実験工房の湯浅譲二らの言説からは、過去の映画音楽での試みにひきつけるかたちでミュージック・コンクレートを捉えていたことも伺える。

このように見るならば、武満の録音技術を活用した器楽の表現はきわめてこの時代の新しい表現と見なされる一方で、過去の前衛を引き継いで押し進めたものとして位置づけられるだろう。そして武満がテープ変調を器楽におこなうようになったことは、武満をこうした伝統につなげる変化だったと言えるのではないだろうか。